
勇者と魔王のメタ発言

ひゐらぎ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者と魔王のメタ発言

【Nコード】

N2952Y

【作者名】

ひぬらぎ

【あらすじ】

おきのどくですが ゆうしゃとまおうは いせかいにてんそうされてしまいました——そうして二人が来たのは魔法のない世界。聖剣はただの剣になっちゃうし、魔法なしの魔王なんてただの人。それで魔物もいないけど、魔物よりも人のほうが怖い。勇者と魔王は、元の世界に戻る方法を探して、共に放浪する。

00：魔王、逃亡を図る。（前書き）

誤字脱字がある可能性大です。

もし発見しましたら、優しい方、報告お願いします。

00：魔王、逃亡を図る。

勇者は聖剣を天へと向けて掲げた。無駄な装飾のない細身で銀の刃が、広間のいくつもの明かりを反射し輝く。すると、銀の刃は自ら深い青の光を発した。サファイアのように深く、しかし澄んだ青の光は傷だらけの広間を照らし、そして凜々しい勇者の顔をも照らす。

と、青い光が不意に治まった。それと同時に、青い光の球がいくつも姿を現し、いまだ青い輝きを帯び続ける掲げられた聖剣を中心に円を作る。

勇者はその聖剣を、前方へと振るった。

すると青い光の球はその聖剣の動きが指示であるかのように、前方へと宙を駆けた。その先にいるのは、片手に大きな杖を握り黒い衣を纏った男――魔王。

だが魔王は何の様子も見せず、茨が巻き付き深紅の花が一つだけ咲いた杖で、トン、と地面を突いた。すると魔王の周囲から漆黒のガラスのようなものが生えてきて、それは半球を作るかのように魔王を覆うと、飛来してきた勇者の青い光の球を弾き返す。

勇者は苦い表情を浮かべた。弾かれた青い光は広間の壁へと音を立てて衝突する。と、魔王を覆う漆黒の壁から、赤い茨の鞭が何本も吹き出してきた。それは蛇のように身をくねらせながら勇者へと殺到する。勇者は目を見開いた。

しかし考えるよりも先に聖剣を握った腕が動いた。青く輝く刃が

宙を滑り、殺到してきた茨を切り落とす。切り落とされた茨は切り口を聖剣と同じ青色に染まると、その光に全てを侵食される。そしてガラスが割れるようにして粉碎し、空気に溶けてなくなる。勇者は舞うようにしてステップを踏みつつ剣を振るう。純白のマントが翻る。切り揃えた金髪の端も揺れる。だが茨は多く、いくら切り落としても次から次へと襲ってくる。

茨の束が、勇者の顔を掠める。頬が切れ、血が流れる。それでも勇者は構わず剣を振るう。背後から地を這い忍び寄ってきた茨を避け、剣を突き立てれば茨は青い光似つつばれて粉碎する。そして床に刺した聖剣を抜き、次の茨を狙う。だがその隙を狙った茨の一つが、ついに勇者の身体に巻きついた。

「ふっ……!？」

茨はきつく身体を締め付ける。勇者は慌てて聖剣を握りなおすも、次の瞬間勇者は投げ捨てられた。宙を飛び、身体は広間の壁に打ち付けられる。全身がばらばらになるような衝撃が襲いかかる。

勇者は崩れた壁の残骸と共に床に落ちた。落ちた瓦礫の上にぐったりとした勇者が倒れ、またその上に瓦礫が落ちる。

宙をうねっていた赤い茨が煙になって失せる。同時に漆黒のガラスの壁も消える。中から現れた魔王は、ぐったりとした勇者を何も言わずに見つめていた。だが深く溜息を吐くと、片手に握った大きな杖の先を勇者へと向けた。すると先端に咲いていた真紅の花から稲妻が宙へと駆け出す。稲妻は広間の高い天井まで上がったかと思うと、勇者めがけて落下する。

だが勇者は目を開けると、すぐさま瓦礫の隙間から飛び出した。

宙を一回転し、床へと膝を突いて着地する。ついさっきまで勇者がいた瓦礫の山に、稲妻が落ちる。勇者は魔王のもとまで駆け出す。聖剣の青い輝きが増す。

魔王は微動もしようとせず、勇者を見つめている。勇者は口を固く結んだ。そして踏み込むと跳ね上がり、魔王へと切りかかった。

高い音が広間に響き渡る。魔王は勇者の聖剣を杖で受け止めていた。だが勇者はにやりと笑うと、魔王の腹へと片足を打ち込み、蹴り上げた。魔王の身体が宙に浮く。しかし魔王は落ちてくることなくそのまま宙に浮遊した。そこに勇者はまた剣を滑らせる。だが浮遊した魔王はその刃をやすやすと避けると、勇者の背後へと着地した。

慌てて勇者は振り返った。そこには杖を構えて不敵に笑う魔王の姿があった。その杖に絡みつくと茨が伸び勇者の足へと絡みつく。絡みついた茨は黒く輝くルーンの文章になると勇者を中心に魔法陣を構成する。勇者が目を見開いてその魔法陣から抜け出そうとするのもう遅かった。魔法陣の内側にあつた床が瞬時に消えたかと思うとそこに漆黒の水たまりが現れた。魔法陣の中にいた勇者は、その水たまりの中へとずぶずぶ沈んでゆく。足、臍、太股、腰、と勇者の姿が漆黒に吞まれていく。

「くそっ！　なんだこれは！」

勇者は漆黒の水たまりから抜け出そうと必死だ。しかし飲み込まれてしまった足は上がらないし、床に手について身体を引っ張り出そうとしてもびくもしない。それどころか、抜け出そうともがけばもがくほど、漆黒の水たまりはあたかも底なし沼であるかのよう

に勇者を呑み込もうとする。そうして腹、胸、と呑み込まれていっ

た。

魔王はにやにやしならそんな勇者を見下ろしていた。

「無駄じゃ、影ほど深いものはない……」

しかし勇者は必死で抵抗する。聖剣を握っているも、両手を床についてこれ以上なんとか吞まれまいと精一杯の努力をしながら魔王を睨んでいる。だがそれでも勇者の身体は確実に漆黒に吞まれていつている。そこで魔王は杖の先で勇者の手を突いた。尖っている杖の先は勇者の手の甲へと刺さる。

「っああ!？」

勇者は思わず悲鳴を上げて、その手を床から放してしまう。そしてその腕もずぶずぶと漆黒に吞まれていき、肩をも吞みこむ。残る命綱は、聖剣を握りつつも床にしがみつく右手だけ。しかし魔王はその手をも漆黒の中へと蹴り入れた。勇者の残された手は、聖剣と共に漆黒へと吞まれ、そして頭をも吞みこまれ漆黒の中へと消えてしまった。

広間は激戦の傷をいくつも残しながらも、静かになった。魔王はただ、勇者の吞みこまれていった漆黒の水たまりを見下ろしている。水たまりからはぼこぼこといくつか泡が出たかと思うと、それきり黙ってしまった。それでも魔王は無表情で水たまりを見下ろす。まるで、勇者が中から出てくるのを待つように。

そうして深く溜息を吐いた。黒々とした癖のついた長い髪を掻き毟り、漆黒の中へと杖先を入れる。

「この物語には勇者が死ぬというエンディングはないんじゃないが……
奴め、中で聖剣を手放しおったな」

やれやれ毎度毎度仕方ない勇者じゃのー、と、魔王は杖で漆黒の中をかき混ぜる。そのとたん、水たまりが泡を噴出しながら膨れ上がった。そして――青い光の爆発。

魔王は後ろへ一歩跳びのくと、青い光の中を見つめる。

目を閉じててもその眩しさが瞼を通り越し、肌を通して分かるほどの輝き。魔王は目を閉じた。

光の中から、輝く聖剣の先が飛び出してくる。それは魔王の胸に深々と刺さり貫通した。そのとたん、青い光が治まる。魔王の前には、剣を握った勇者の姿があった。

魔王は胸に聖剣を突きたてられつつも、にやりと笑った。しかしその表情も一瞬にして苦痛のそれへと変わる。

自信に満ちているも、何故か驚愕した表情を浮かべる勇者は、魔王の胸に刺した聖剣をゆっくりと引き抜いた。すると魔王はよろめくも数歩後退し、そこで片膝をついてうずくまった。脂汗を浮かべひどく苦い顔をしながら、胸の傷へと触れる。聖剣による胸の傷からは、青い光が漏れていた。その光は少しずつ、魔王の身体を覆っていく。身体を侵食している。

「くう……」

魔王は苦しそうにうめいた。青い光に侵食されていく身体が震えている。勇者はそんな魔王の様子を見ながら、不敵に笑った。

「終わりだな、魔王」

輝く聖剣を、一振りする。

「『魔王の胸に聖剣を突き立てよ』——なるほど、聖剣の予言はこういうことだったのだな。お前の胸に聖剣を突きたてれば、聖なる光がお前を浄化するのだな。そして浄化されたのならば、悪の化身であるお前は何も残すことなく消え失せる」

魔王は殺気のこもった瞳で勇者を睨んでいた。しかしその口から出るのはうめき声だけ。しかし、そのうめき声が笑いへと変わると、勇者は目元をひくつかせた。

「何がおかしい？」

「全部じゃよ」

青い光が身体を蝕んでいく。しかし魔王は顔を上げ、嘲るような笑みを勇者へ見せつけた。

「こんなもので、わしが死ぬだと？ まったく滑稽じゃ！ 世界中の悪の集結であるこのわしが、そんなちやちな剣で消えるとは思っておるのか！」

魔王は身体をゆっくり起こすと、杖を頼りに立ち上がる。

「その剣はわしに深手を負わせるだけしかできん。わしを殺すことは無理なこと」

「な、何故だ！」

勇者が危機せまった顔で怒鳴る。

「こ、この剣は我らの希望、お前を倒すための聖剣ではないのか！
この剣を持つてすれば、悪は滅するのではないのか！」

「お前、何を言っておる」

魔王は鼻で笑った。

「悪がこの世から消え去るわけがなかるう。明かりが人々を照らせば、人々の足下には影ができる。善と悪もそれに同じ。表裏一体のものじゃ。そして悪がある限り、わしは死なん。死なないのじゃ！」

魔王は杖で足下の床を叩いた。するとそこに、魔王を中心とした魔方阵が浮き出る。それはこれまでの戦いで姿を現した魔方阵とは違い、桁違いに大きくルーンの量も多い。魔方阵は勇者の足下まで広がった。勇者は慌てて跳び退き、魔方阵の外へと出る。魔方阵の中央では、深手を負っても威厳に満ちた魔王が浮いている。

「何をする気だ！」

勇者は聖剣を構え、宙に浮く魔王を睨む。魔方阵が赤紫色に輝き、魔王の姿を照らし出す。魔王は何故か勝ち誇ったように笑っていた。

「少々暇をもらおうと思ってな。わしは傷を負いすぎた……世界の狭間で、休ませてもらうぞ？」

「……逃げる気か！？」

「まあ、平たく言えばそういうことじゃ」

魔方阵の輝きが強くなる。魔方阵のルーンが浮き出し、魔王の周りに漂う。

「勇者よ、お前は中々強かったぞ。ま、中々なんだがな。もう少し修行しておけばわしを楽に倒せたんじゃないのかう？」

魔王は笑いながら勇者を見下ろす。

「さて、永い年月をかけて傷を癒させてもらうでしょう——悪がこの世に蔓延れば、わしはまた蘇る。それはいつになるのだろうか」

魔方阵の輝きがいよいよ眩いほどになった。宙を舞うルーンも並んで文章となり、魔王の身体を包み始める。

「お前に会うことは二度とないだろう、勇者——さらばだ、わしとお前が再び出会うとき、お前は永い年月に骨と化しているだろうよ！！」

魔方阵が爆発した。赤紫色の光が広間を満たし、勇者の視界を満たす。

「くそつ……」

勇者は聖剣を固く握った。

「くそつ……！！」

光へと目を見開くと、世界は赤紫色で何も見えない。だが勇者は、その中へと突っ込んでいった。足音が光の中に響く。恐怖はなかった。あるのは——怒り。

「逃げるなんて……卑怯だぞ！　魔王！　大体お前が死なないのな

ら、私は一体なんのために旅をしてきたのだ!! 結構辛い一人旅だったんだぞ!」

心の奥底から叫びながら、光の中を駆ける。そして光の中に浮く魔王の姿を見つけると、そこへ跳びかかった。

「うええっ!?!」

魔王が心底驚いた顔をして声を上げる。勇者が魔王の上に跳び乗ると、魔王は床へと落ちた。

「お、お前、なんでここにいるのじゃ! 早くどこかに行け!」

床にうつ伏せに倒れた魔王は、上に乗る勇者へと顔を向ける。するとそこには、勇者らしくない凶悪な顔をした勇者の顔があつて。

「逃げるだなんて許さないぞ、魔王……!」

「はあ?」

「私は勇者だ。お前を倒すまでは、お前の命を奪うまでは、城に帰れないのだ!」

「はあ!?! お前の役目はもう終わったぞ! わしは倒れた! わしは倒れたのじゃ! お前の役目はわしの討伐、もう終わったのじやぞ!?! だからこれ以上手出しなし!」

魔王が必死の形相で勇者へと怒鳴る。そしてのしかかるようにして乗る彼を落とそうとするも、勇者は微動だにしない。

「ほら、早くどこかぬか! お前が乱入したせいで、ワープ座標が狂ってしまっているのか! ていうかお前ついてくんじゃない! 一緒に世界の狭間に行く気か?」

だが勇者は聞く耳を持たず、手に握った聖剣の刃を魔王の首に当てると、ぼそりと、

「首を落とせば死ぬのだろうか？」

「やめてええええ！！」

勇者の下で、魔王は暴れる。先程の威厳の欠片もなく、子供のようにもがき、足をばたつかせる。心なしか目は涙ぐんでいる。

「こらあ、貴様！ わしを殺したらこの世界どうなると思っておるんだ！ わしが消えたらこの世界滅ぶぞ！」

「うるさいタレ目！ お前が消えたら一体何が起こるというのだ！」

勇者が怒鳴る。

そのとたん、世界が揺れた。何かと勇者が顔を上げ、周囲の光を見回す。その次の瞬間、光が一瞬にして漆黑へと変わり、目の前が何も見えなくなり、激しい衝撃が勇者を襲った。まるで地面に打ち付けられたような感覚。しかしいまだに浮遊しているような、馬のように速い乗り物に乗っているような、はたまた船のように揺れるような感覚。ひどく気持ちの悪い感覚に激しい衝撃が襲いかかる。

そこで勇者の意識は途切れてしまった。

01：勇者、森に落ちる

耳元で鳴る轟音。身体を包むようにして下から上へと流れている空気の激流。上はオレンジ色で下は緑色。マントが激しくはためている。

そこでようやく勇者は気がついた。

——私、頭から真っ逆さまに落ちていないか？

思った通りだった。下のオレンジ色は夕日の空、頭上にあるのは広い森。勇者は森を目指して、頭から落下していた。しかし、勇者は焦らなかった。

「なんのこれしき……」

いつの間にか、片手には聖剣が握られていた。勇者はその切っ先を頭上へと、地上へと向けて叫んだ。

「聖剣よ！ 私に翼を！」

勇者が自身の落下に気付いてから叫ぶまで、約二秒。

勇者の叫びに答え、聖剣が輝く。すると聖剣の刃から巨大な一對の光の翼が現れ、大きく羽ばたく。すると落下していた勇者の身体は聖剣の羽ばたきとともにふわり浮く——はずだった。

聖剣は勇者の叫びに反応しなかった。翼を現すこともなければ、輝くこともなかった。

「ぬ？」

勇者が叫んでから聖剣の異常に気付くまで、約五秒。

そしてその三秒後、勇者は森の中へと落下し、結果、勇者は気がついてから十秒後、目覚めたばかりであるにも拘わらず、木々の枝に身体を打たれながら地面に叩きつけられたのだ。

『ついに聖剣にツン期が来たのかと思った』——のちに勇者は、このときのことを魔王にそう語った。

地上へと叩きつけられた勇者は、ゆっくりと身体を起こし、地面に座り込んだ。幸い、身体にはひっかき傷程度の怪我しかなかった。もともと魔物との戦いで鍛えられた身体だ、高いところから落ちたものの、大事に至るようなことではなかった。だがそれでも勇者は人の身体である。落下した衝撃に、全身がひりひりと痛んだ。

「ぬうん……」

あぐらをかき、腕を組み、勇者は不機嫌の表情を浮かべて首を回す。そのついでに周囲を見回せば、深い森が勇者を取り囲みどこまでも続いている、上を見れば夕日に染まった空があった。

ここは一体どこだろう。そもそも、何故自分は空から落下していたのだろう。

頭の奥が痛い。何があつたのか、よく思い出せない。魔王の城があるという森に向かう前に、近くの村で一休みをしたのは憶えている。そこから先の記憶は一切ない。

ではここは、魔王の城があるという森の中なのだろうか。道中魔物に襲われて、記憶が抜けてしまったのか？　しかしこの森は、あの森とは様子がまったく違う。別の森なのだろう、魔王の城があるという森は、茨でそこらじゅうを這っていて、村までも伸びてきていた。だがこの森には茨なんて全くない。それどころではない——魔物の気配さえしない。

「一体ここは……？」

勇者はぼやくように呟くと立ち上がる。そして森の中を進み始めた。じっとしていても、何も起きないしわからない。とりあえず西へ——夕日へ向かって進む。

旅の途中で来た森でもなさそうだった。このような森、見た記憶もないし、訪れた土地は全て魔物がすでに蔓延っていた。恐らく、初めて訪れる森だ。進みながら周囲を見回せば、動物の姿が見える。木の枝には小鳥が止まっていて、よく見ると巣もある。地面を見ればウサギの足跡のようなものもあり、草むらの中を見れば蛇もいる。いままで訪れてきた魔物の蔓延る森では見られない光景だ。魔物が森に住み着けば、ほとんどの動物は食べられるか、その前に逃げ出す。

「……ここはまだ、魔物の手が及んでいない、神聖な森なのだ」

久々に目にする森の動物達を見ながら、『ハートの国』にはまだこのような場所が残っているのだと思うと、勇者は静かに微笑んだ。

だがその笑みも一瞬だけで、すぐに凜々しい表情に戻ってしまう。魔物の手が及んでいない森があると知って安心した分——いずれはこの森も魔物だらけになってしまふと考えると、笑っていられなくなつた。

聖剣に選ばれた自分が魔物の王——魔王を討伐しないと、この森もこの森以外の場所も魔物だらけになってしまう。そうして愛する自国『ハートの国』は魔物の国となってしまう。

自分は、それを阻止するために聖剣に選ばれたのだ。魔物の生まれる魔力を世界中に放つ魔王を倒すために。

自ずと聖剣の柄に手を触れる。

——一刻も早く、魔王を倒さなければ。

口を固く結ぶ。

——奴は妙な魔法を使ってくる……気をつけなければ。

——そういえばあの杖、茨が巻きつき赤い花が咲いた杖だったが、最初は禍々しいと思つたがよくよく考えたら随分ファンシーな杖だったな……。

魔王の杖を思い出す。古い杖に、暗緑色の茨。そこに咲いた赤い花ばかりが妙に目立っていた。ゴシックでどこなく可愛らしい杖。

と、そこで勇者は気付いて足を止めた。

「……なぜ私は魔王のことを知っているのだ？」

まだ魔王にあったことなんて、一回もないのに。これから魔王の城へ向かう予定なのに。

だが勇者の頭の中には、確かに魔王の姿があった。病弱そうでタレ目の男。振り下ろした剣を、杖で受け止められた。

——振り下ろした剣を杖で受け止められた？

それはつまり、魔王と戦った、ということなのだろうか。

だがまだ自分は魔王の城に書いていないし、そもそも魔王に一度も会ったことがないわけで。

曖昧な霧のような記憶がゆっくりとあふれ出してくる。だが、どれも曖昧すぎて確かな記憶なのか分らない。

もしかすると、夢のなかで魔王と戦った記憶なのかもしれない。そう考えると、そんな気がしてきた。そもそも魔王があんなファンシーな杖を持った病弱そうなタレ目の男であるはずがない。魔王はもっと、恐ろしいものだろう。

だが記憶は止まることなく溢れ出る。一体これは、なんなのだろう。自分の頭が、おかしくなってしまったのだろうか。

「……聖剣よ、私に真実を」

勇者は静かに剣を抜くと、その刀身を額に当てた。もしかすると、自分は何かの魔法にかかっているのかもしれない。それで頭がおかしくなったのかもしれない。そうであるならば、この聖剣が輝き魔

法を解いてくれるはずだ。しかし聖剣は輝かない。どうやら、頭は正常らしい。そういえば先程も聖剣が輝かなかった気がするが、頭は正常のようなのだ。気のせいだろう。

聖剣を鞘に戻し、勇者はまた進み始めた。何か分かったわけでもなかった。しかしじつとしていられない。先に進まなければ。

しばらく進むと、せせらぎが聞こえてきた。この先に、川があるらしい。そうわかると、自然と早足になる。川があるのなら、付近に川を利用する人が住んでいてもおかしくない。

目の前に、ゆっくりと流れる小川が姿を現す。幅も小さく底も浅い清流だった。ひとまず勇者は川の畔に膝をつくと、その流れに両手を差し入れ、きれいな水を両手いっぱいにつくった。それをおもむろに自身の顔にかけ、顔を洗う。顔を洗えば気分が晴れるだろう。

だがそう簡単に気分は晴れなかった。胸の中にもやもやがたまっているし、頭の中ももやもやする上に奥が痛む。

水面をみれば、自分の顔が映っている。いつもと変わらない顔だった。

と、川上から、草むらを踏み分ける音が来っこえてくる。勇者はすぐに顔を上げると、聖剣の柄へと手を伸ばした。足音はゆっくりだが徐々にこちらへと近づいてくる。魔物かもしれないと、勇者は足音のする方を睨んだ。

しかし、森の奥から姿を現したのは、人の良さそうな笑みを浮かべた、白髪の老人だった。杖をつきながら、ゆっくりとこちらへやってくる。

「おや、この森に人がいるとは、珍しいのお。どうされたのじゃ？」

老人は勇者に気付くと、笑顔でそう問う。しかし勇者は聖剣の柄から手を放そうとしない。もしかすると、魔物が老人に化けているのかもしれない。しかし、そうであるならば聖剣が危機を察知して輝くはずだ。聖剣の様子を見れば、輝く様子なんて全くない。この老人は魔物でないと、教えてくれている。

「こんばんは、老人よ。ちょうどよかった、ここは一体どこなのだ？ いつの間にかこの森に迷い込んでしまったのだが」

勇者は聖剣の柄から手を放し立ち上がると、老人に笑い返した。すると老人は答えた。

「ここは『迷いの森』じゃよ、お若いの」

——『迷いの森』？

初めて聞く名の森だった。勇者は首を傾げた。

「初めて聞く名前だ」

「初めて聞くじゃと？」

すると老人は、一瞬驚いたかと思うところと笑い出した。勇者は何故老人が笑っているのか分からず、また首を傾げる。老人は、すまん、と謝ると勇者に言った。

「お若いの、お前さんは田舎から来たんじゃない？ だからこの国の大半を占める『迷いの森』を知らないのじゃな。うむ、仕方のない

「ことじゃ」

だが勇者は、老人の言葉の意味が分からなかった。

「いや……私は王都から来たのだが……それに、国の大半を占める森の存在なんて知らないぞ」

「なぬ？ お若いのが、王都から来たのか。そういえば騎士様のような姿をしているの」

勇者は頷いた。確かに自分は王都から来たのだ。その王都で聖剣に選ばれ、国王に魔王討伐の命を受けた。

「私は勇者だ、老人よ。これから世の平和のため、魔王を倒しに行くのだ」

勇者は腰に両手をあて、名乗る。しかし老人はいまいち分からない様子で首を傾げた。

「勇者？」

「そうだ。私は聖剣に選ばれし者だ」

老人は自分の事、聖剣の事、魔王の事を知らないのだろうか。勇者はふと思った。自分のことは、もう国中に知られているはずだった。しかし、この老人はここまで言っても分からない様子でいる。

「……お若いのは、勇者なのか？」

しばらくして、老人は子供のように尋ねてきた。勇者はそうだと肯定する。

「聖剣に選ばれし、魔王を倒す者——それが私だ」

老人はそれを聞くと、黙り込んでしまった。一体どうしたというのだろうか。

だがしばらくして、

「……迷いの森は気を狂わせるからの」
「？」

不意に老人は顔を上げた。そして、

「お若いの、お主、どこからやってきたのじゃ？」
「どこからと言われても……」

勇者は自分が何故この森にいるのか、考える。

「どこからと言われても……気付いたら私は空から落ちてきていて、そしてこの森にいたのだ」

すると老人は難しい顔をした。

「お若いの……もしや、頭を打ったりしなかったかの？」
「した……かもしれない。空から落ちたときに」

老人はそれを聞いてうんうんと頷くと、勇者の背をぽん、と叩いた。

「もうじき夜じゃし、わしの家で休むが良い。一眠りすれば、現実に戻るはずじゃぞ。なあに、わしの家はすぐそこじゃ」

老人は勇者の背を力強く押す。勇者は困りながらも老人に従い、前に進む。

「と、泊めてくれるのはありがたいが、『現実に戻る』とは、どういうことだ？」

「そのままの意味じゃ」

深く溜息をつき、しかし笑顔を浮かべて老人は勇者の顔を覗き込む。

「お若いの、夢を見すぎじゃ」

02：勇者、とりあえず休む

「だから、私は勇者なんだ」

勇者はナイフとフォークで焼き魚の骨を取り除きながら断言する。魚の小骨はうまく取れず、魚の身はぼろぼろになってしまっている。しかし勇者はそれでも諦めずに小骨を取ろうとする。

外はもう暗くなり、冷たい風が吹いていた。しかし老夫婦の家の暖炉では炎が燃えていて、とても暖かった。勇者と共にテーブルについて食事をする老夫婦は、顔を見合わせる。老人の妻である老婆が溜息を吐く。

「まだ言っておるのお。じいさま、この子は少し危ないんじゃないのかい？」

「ばあさんや、お若いのは、きっと寝ればよくなるさ」

老夫婦は笑い合った。しかし勇者は顔を上げると不機嫌に眉を顰めた。

「私はまともだ。どこも悪いところはない」

勇者がそんなことを言う。だから老夫婦は諦めの混じった苦笑いを浮かべ、食事に戻った。二人とも、勇者と違い焼き魚の骨を綺麗に処理している。

「ところで老夫婦よ、あなた達は本当に魔物を見たことがないのか？ この森にはいないようだが、他の場所で見たりしなかったのだろうか？」

勇者は二人に尋ねる。先程から、何度も聞いている質問の一つだった。しかし老夫婦の答えは先程と相変わらず同じだ。

「そんなもの、見たこともないのぉ」

「あたしも見たことないねえ」

「『悪が姿をなした生き物』のことだぞ。本当に、見たことないのか？ 聞いたこともないのか？」

「ないのぉ、一度も。そもそも、そんなものがいたら、世の中もつと大変なことになつとるはずじゃよ」

老人が笑い、フォークに魚の白身の切れ端を口に運ぶ。勇者は食事する手を首を傾げて止めた。おかしい。魔物は確かにこの世にいるものなのだ。この目で何度も見てきているし、勇者の知る人々は毎日魔物に怯えながら生きてきた。しかしこの老夫婦には、そんな様子が全くない。それどころか魔物の存在を否定する。

「ねえ、お若いの」

と、老婆が諭すような表情を勇者に向ける。

「あんたの言っているような魔物、魔法、魔王、勇者——それは空想のものなんだよ。お若いのはまだ夢を見ているんだ、早く起きて戻っておいでなさい」

だから勇者は更に首を傾げて難しい顔をした。魔物、魔法、魔王、そして勇者が空想のものならば——『勇者』である自分は一体何であるのか。

勇者はここにいて、自分が勇者なのだ。勇者はナイフとフォーク

をテーブルの上に叩きつけるように置くと、立ち上がった。

「魔物の魔法も魔王も勇者も、あるのだ、この世に。そうでなければ、『勇者』である私は一体何者なのだ？」

老夫婦が食事をやめて勇者を見上げる。勇者は腰の鞘から聖剣を静かに抜く。

「……これは聖剣だ。魔王を討伐する人間を選び、導く剣だ。私はこの剣に選ばれた。だから私は勇者なのだ」

細い銀の剣。その腹に、真剣なまなざしである自分の顔が映っている。勇者はその顔を見た。いつもと変わらない、自分の顔だ。

「お若いの、それはただの剣じゃよ」

だが老人は聖剣を見てそう答えた。だが勇者は反論する。

「これは聖剣だ。青く輝き悪を払う剣だ」

「ならばお若いの、その証拠を見せてくだされ」

「証拠……か。輝かせればいいのだな」

青い光は聖剣の証。勇者は聖剣の腹を額に当て、そして目を瞑って念じた。

——聖剣よ、輝け。

そう念じれば、瞼を通してでも瞳を刺激する、眩い青い光が輝くはずだった。しかし聖剣はうんともすんともいわない。しばらく経って、勇者は目を開けた。冷たい銀の刃は、家の暖炉の炎を照らし

返して輝いている。自身から青い光を発するような様子は見られない。一体どうしたというのだろうか、念じれば輝くはずなのに。

「何故輝かない」

勇者はついにそう言葉を漏らした。銀の刃には、驚愕の表情を浮かべた自分の顔がある。

「当たり前じゃよ、お若いの。それはただの剣なのじゃから。そう驚くことではないぞ」

老人が慰めるような口調で勇者に声をかける。しかし勇者の顔はますます蒼白になった。

聖剣が、ただの剣になるはずがないのだ。

一体何がどうしたというのだろうか。聖剣は不調なのだろうか。あるいは自分が不調なのか。または一度は勇者として選ばれた自分だが、いまはその資格をなくしてしまい、だから自分が念じても輝かなくなってしまったのだろうか。はたまた老人の言ったように、聖なる力を忘れてただの剣になってしまったのか。

「ほら、あんた、魔法も魔物もないんだよ。目を覚ましなさい」

老婆が溜息を吐く。だが勇者は信じられなかった。

「ま、魔法なら使えるぞ！これで何度も焚き火に火をつけ、魔物を退治してきたのだから！」

勇者は苦し紛れに右手の平を上へと向ける。そして集中する。頭

の奥で、真っ赤に燃え上がる炎をイメージする。この家の暖炉で燃えているような暖かく穏やかな炎ではなく、全てを焼き尽くすような熱く激しい炎を脳裏に浮かべる。そうすれば、右手のひらに炎の玉が現れるはずだった。いつもこの魔法で焚き火をしてきた。いつもこの魔法で料理もしてきた。魔物だつて倒してきた。日常的に使っていた魔法だ、できないはずがないのだ。

だが、いまだに右手の平に炎の玉は現れない。それどころではなく、自分の身体にあるはずの魔力の流れを感じない。

「な、何故だ……私は魔法すら使えなくなってしまったのか……？」

こんな初歩的な魔法、いつも使えたはずなのに。何がどうしてしまったのだろうか、頭打つまで上げたレベルが、一気に落ちて最初に戻ってしまったのだろうか。

「お若いの、わかったじやろう？ 魔法はないんじやよ」

「そんなはずはない……」

聖剣が実際に輝かないも、魔法が実際に使えないも、老人が言うも、勇者は信じられなかった。

「そんなはずはないのだ。私はハートの国の勇者なのだから……」

勇者は自信に言い聞かせるように呟く。聖剣を静かに鞘に納め、しかし顔は上げられない。

と、老人が首を傾げる。

「ハートの国？」

「そつだ。我らが国のことだ……まさか魔法同様な、なんて言わないだろうな。我らの国だぞ。世界にたった一つしかない国だ」

老人は老婆と顔を見合わせた。老婆は心底心配した表情を浮かべていた。

勇者はひどく嫌な予感がした。

「あんた、お若いのはもう休んだ方がいいんじゃないのかい？ あたし、ちよつと部屋を片づけてくるよ」

老婆は椅子から立ち上がると、いそいそと階段を駆けあがり二階へと姿を消してしまった。その様子を見ていた勇者は、ひどく不安になって老人へと視線を戻した。老人は深く溜息を吐く。

「お若いの、相当まいつているようじゃな——ここはスペードの国じゃよ。世界にたった一つしかない国じゃ。ハートの国なんて、みたことも聞いたこともない。そんな国、ありやせんぞ」

勇者は口を堅く閉ざすことしかできなかった。

その後、勇者はろくに食事をせず、二階の空き部屋に案内された。

「ここを使っておくれ」

老人はそう言って、その空き部屋の扉を開けた。部屋の中にはベッドが一つに、沢山の本が詰まった本棚、そしてテーブルと椅子が一つあった。

「以前息子が使っていた部屋じゃ。少し狭いが使っておくれ」
「息子がいるのか？」

勇者は老人を見下ろした。老人は頷いた。

「いまは王宮で一兵士となつとるよ。だから家にはいないんじゃ…
…歳はちょうど、お若いぐらいかの」

勇者は黙って部屋の中へと入った。質素な部屋の中、妙に充実した本棚に目がいく。本棚には、ぎっしりと本が詰まっている。そのほとんどが厚いものだ。

「少し見てもいいか？」

振り返り老人に聞く。老人は笑って頷いた。

厚い本が綺麗に並んだ本棚。勇者はその中の一冊を抜き取り、ページをめくる。と、その指が止まり、あるページを開いた。そこには、勇者にとってよく見慣れたものが描かれていて。

剣を持った騎士が、ドラゴンに挑んでいる絵だった。

「これは……英雄か？」

とつさに勇者はそう思い、笑顔を浮かべる。だが老人は、

「それはファンタジー小説じゃ」

「ファンタジー？」

「空想の物語じゃ。現実にはあり得ぬことを書いたものじゃ」

老人は静かに言う。

「その本は、お若いのの言う魔法や魔物が出てくるものじゃ。じゃが、それは本の中の出来事なのじゃよ」

勇者は何も言わずにその本の表紙を見つめていた。老人は抱えていた服をベッドの上に置くと、部屋を出ていく。

「寝間着はベッドの上に置いといたからの。ゆっくり休むんじゃぞ、そしたら正気に戻るじゃろ」

そうして一人になった後も、勇者はただじっと本を見つめていた。

ちらりと腰の聖剣を見る。

「しかし私は……私はハートの国の勇者なのだ……」

本を開けば、先ほどの挿し絵のページが目に残る。剣を持ち、ドラゴンに挑む騎士の絵。これが日常なのだ。人々は魔物に怯えながらも戦い、そして自分はそこに終止符を打つために旅に出た。

これが日常なのだ。これが現実なのだ。

しかし、いま日常はどこへ行った。現実はどこへ行った。

もしかすると、これは全て夢なのかもしれない、と老人に渡された寝間着に着替えながら勇者は思う。一晚寝て起きれば、自分は森の中だか宿だかで休んでいて、妙な悪夢を見たな、と思うのかもしれない。はたまた魔物に魔法をかけられていて、ふとした弾みで魔法が解けるかもしれない。

勇者はそう願いながらベッドに入った。しかしなかなか寝付けない。もし、いままで日常だ現実だと思っていたことが夢であって、いま見ているのが現実であるのなら、と考えると、ひどく怖くなっ

た。

もし世界に魔法も魔物も魔王も勇者もないのなら。

『勇者』である自分は、一体何者なのだろうか。

03：勇者と魔王、再会する

——轟音がした。ベッドが揺れ、部屋が揺れ、家が揺れる。先程まで鳴き歌っていた森の鳥達が飛び立つ音がする。

「老夫婦よ、あなた達の目覚ましは随分とダイナミックなのだ……」

ベッドの中で、勇者は半分まどろみながら寝返りを打った。目をぼんやり開けば、目前にある窓は輝いている。朝日が眩しい。勇者は思わずかけ布団のブランケットを掴むと、中に潜った。

しかしいつまでも寝ているわけにはいかない。ベッドの中でもぞもぞと動くと、ブランケットをどけて勇者は上半身を起こした。そして部屋を見回すと——部屋の中央で、一人が逆さまになって床に刺さっていた。

流石の勇者も、最初はこれは夢だと思った。目覚めると部屋の床に人が刺さっていたという夢。しかもただ刺さっているわけではなく、逆さまになって胸から上が床に刺さっているというシユールな夢。夢でなかったのならば、一体何であるのだろうか。

しかしその床に刺さっている人の傍らに妙なものが落ちていて、勇者はそれに気付いた。ベッドから降りると、床に転がっているそれを手にとって眺める。

それは奇妙な杖だった。古木で作られた大きな杖だが、何故が暗緑色の茨が巻き付いていて、しかもその茨には深紅の花が一つ咲いている。厳めしく見えるも、よく見ればファンシーな杖だ。

どこかで見たことのある杖だった。鼓動が速くなる。

片手にその杖を握ったまま、勇者は視線を床に刺さった人物へと向ける。床に刺さっているのは長身痩躯のおそらく男。胸から上が床に刺さってしまったため、どんな顔をしているのかは分からないが、着ているものなら分かる。金や赤の刺繍が入った、どこことなく高貴に見える漆黒のローブ。足に履いているのは、鎖の巻き付いたこれまた黒いブーツ。

どこかで見たことある姿だった。鼓動が速くなった次は、頭の奥が熱くなる。

どこかで見たことある杖、どこかで見たことある姿。

どこで見たのか。

魔王の城で見た。

——こいつは魔王だ。

頭の奥で答えが出る。すると、いままでの記憶がはつきりと蘇ってきた。魔王の城に辿り着いたこと。城の中をつき進んだこと。魔王のメイドを名乗る魔物と死闘したこと。その果てに魔王を見つけ出し決戦を迎えたこと。そして——自分が勝利するも、逃げようとした魔王を追って、何らかの魔法を受けてしまったこと。

一番大切なことも思い出せた——自分は確かに聖剣に選ばれたハートンの国の勇者である、ということ。

昨日まで混乱していた頭の中が、一気に落ち着く。この魔王のせいで、おかしいことになったのだ。この魔王の魔法のせいで、世界がおかしくなっているのだ。

天井を見上げれば、大きな穴が開いていて、青空が見えている。どうやら魔王は、空から落ちてきたらしい。

勇者は床に刺さった魔王の両足首を掴むと、力を込めて引き抜いた。床のめくれる音、割れる音がし、そうして床下から魔王の頭が出てくる。魔王の全身が日の下に出てくると、勇者は魔王を床に投げ出した。魔王は仰向けになって床に転がる。顔をみれば、見覚えのある赤い瞳のタレ目。間違いなくこれは魔王だ。

魔王は勇者をじっと見つめていた。そして開口一番に、

「……ぬう、痛い。わし、一体どうしたんじゃ？」

そんなことを言うものだから、勇者は額に青筋を立て、魔王の胸ぐらを掴み怒鳴った。

「『一体どうしたんじゃ？』だと！？ その台詞は私のものだ！！ 貴様、一体何の魔法を使った！？ 一体何をした！？ 世界がおかしなことになってしまっているではないか！」

「んう、ぬう？」

魔王は目を白黒させ、怒鳴る勇者を見つめる。そして口を開けて驚いたかと思うと、

「なんじゃ！ 勇者、お前、やっぱりついてきてしもったのか！」

そしてにやにや笑う。

「ふむ、怪我もなく無事の様子じゃな」

またそんなことを言う。勇者は思わず、目を丸くしてしまった。腕の力が抜け、魔王の胸ぐらを離してしまふ。そして放心する。

——無事の様子だと？

胸ぐらから手を離された魔王は、床にへにやりと座り込む。そして勇者を見上げて何か言おうとするも、その前に勇者は飛びかかるようにしてまた魔王の胸ぐらを掴むと、目を怒らして怒鳴った。

「何故私がお前に心配されなければならないのだ！！　そもそも私が無事に見えるのかこのタレ目！！　お前の魔法のせいなのか、私は魔法が使えなくなって困っていたのだぞ！　しかも聖剣も輝かなくなっただ！！　おまけに記憶を飛んだ！　そして助けてもらった老夫婦に話を聞けば、ここはハートの国ではないし、魔法も魔物の魔王も勇者もないと言われた！　一体何の魔法を使ったのだ、魔王！！　お前のせいで世界がめちゃくちゃだ！！　直せ、いまずぐに直すのだ！！　さもないと貴様の首をはねるぞ！！」

「ゆ、勇者よ、落ち着け……くるじい……喉しまっておる……」

勇者は怒りに任せて魔王を突き飛ばした。魔王は派手に音を立てて床に転がり、咳き込む。そして勇者を見上げた。

「お前……朝からそんなにキレるでない……本当に血管切れてしまっぞ……」

しかし勇者は魔王の言葉を聞こうとしない。無言で見下ろしてい

る。

と、階段を駆け上がったってくる足音がした。直後に部屋のドアが開け放たれ、老夫婦が慌てた様子で部屋の中に入ってくるも、天井と床にできた大きな穴を見て悲鳴を上げて立ち止まった。そして勇者を見て、老人が叫んだ。

「こっ、これは一体何事じゃ！？　びっくりしすぎて心臓が止まってしまうかと思っただわい！」

老夫婦は非常に動揺している。しかし勇者は、床に転がる魔王を指さすと、凜々しい顔で言った。

「老夫婦よ！　こいつが魔王だ！　全ての悪を束ねる、邪悪そのものだ！」

「ま、ま、魔王？」

老人の後ろで、老婆が首を傾げて魔王を見つめるも、顔を上げて叫ぶ。

「そんなことはどうでもいい！　あたし達の家に穴を開けたのは、一体誰なんだい！？」

「この魔王だ！　この魔王が上から落ちてきたのだ！」

勇者はとっさに答えた。怒る老婆の顔が、あたかも凶悪な魔物のように恐ろしいものとなる。老婆は魔王へと進み出る。

すると魔王は顔を青ざめさせて、勇者を指さした。

「わしが悪いのではない！　こっちの勇者が悪いのじゃ！」

「はあっ!？」

勇者は驚いて魔王を見る。魔王は半分笑い、半分怯えていた。

「わしではなく、こいつが穴を開けたのじゃ！」

「貴様、ち、違う！ 断じて違う！ 貴様、魔王、何故嘘を吐く！」

「わしがここに落ちてくる原因となったのは、この勇者じゃ！ だから勇者が悪いのじゃ!!」

「貴様何を！ 言いがかりではないか！ 実際に穴を開けたのは貴様だ!!」

「とにかく勇者が悪いのじゃ!!」

勇者と魔王は怒鳴りあう。しかし、そこで老婆が怒鳴った。

「うるさい!! 黙れ黙れ、黙らんかい!!」

老婆の表情が更に恐ろしいものとなる。言い合っていた勇者と魔王は黙った。老人はいそいそと部屋から逃げ出している。

「それでえ？ これはあんた達二人の仕業かい……?」

私は違う、と勇者は否定しようとするも、老婆が恐ろしくて口が開けなかった。

何か言えば、恐らく殺される。そんな勢い。

床に転がっていた魔王が、自身の杖を拾い勇者へと駆け寄る。魔王を見ると、がたがたと震え涙目になっていて、か細い声で言った。

「ゆ、勇者よ……この老婆の魔物は一体何じゃあ……わしの配下のものじゃないぞう……これは、きつと、逃げなきゃ殺される……」

鬼の表情の老婆が、じりじりと二人へ寄ってくる。勇者と魔王はゆつくりと後退するも、部屋は狭い。背後を見ればすぐそこに壁があり――窓があった。

——これだ。

「魔王よ、背後を見る」

勇者がそつと呟くと、魔王は言われたとおり背後を見て、大きな窓があることを確認する。勇者は続ける。

「あの窓、丈夫そうだ……いいか、いち、にの、さん、だ」
「う、うぬ……」

そして勇者はすぐに行動する。

「いくぞ……いち！」

勇者は足下に置かれていた自らの聖剣を手取る。魔王は窓のすぐ横に立つ。

「にの！」

二人は手にした各の武器を大きく振りかぶる。

「さんっ……！」

そして武器で窓ガラスを思い切り叩いた。窓ガラスはヒビが入ったかと思うと、派手な音をたてて粉々に割れる。その破片が朝日に輝く。

老婆が目丸くしている。しかし二人はそんなことを気にせず、窓から外へと飛び出した。

だが窓のあるのは家の二階だ。二人は外に飛び出した瞬間、二階分の高さを落ちて地面に落下するも、急いで立ち上がると慌てて森の奥へと駆けだした。

04：魔王、焦る

勇者は突然魔王の胸倉を掴むと、その背を地面に叩きつけた。魔王が、こふ、と空気を吐き出す。手に握られていた杖が地面に転がる。

「な、なんじゃ一体――」

魔王は目を見開いて驚く。しかし勇者は構わず聖剣を鞘から抜くと、魔王の頭の横、すれすれの地面へと突き刺した。ざくりと音がして切っ先は地面に刺さる。驚いた鳥達が空へと慌てて飛び立つ。魔王も息を呑んで身を震わせた。

鳥達がいなくなった森は、まだ朝で眩しい陽光が差し込んでいるというのに、恐ろしいほどに静かになった。地には冷気が這っている。魔王の上で、地面に刺さった聖剣を両手で握ったまま、座った目で魔王を見下ろした。瞳孔は開ききっていて、口元には妙な笑みを浮かべている。それがまた恐ろしくて、魔王は身動き一つもできなかった。

「……さて、魔王よ」

勇者の口が、裂けたように開き、真紅の中が見える。

何こいつ魔物なの？ とつさに魔王は思ったが、もちろん口に出せなかった。

「貴様がしたこと、最初から話してもらおうか？」

勇者は魔王を見下ろしたまま、何一つ動こうとしない。魔王も勇

者の気迫に抑えられ動けない。しかし魔王はもごもごと口を動かした。だが口が動くだけで声は発せられない。勇者のあまりの鬼の形相に、魔王は声がでなくなってしまったのだ。

「分かる言葉で、話せ」

もちろん勇者はそんなことを知らない。地面から聖剣の切っ先を一旦引き抜くと、また地面に突き刺した。先程よりも魔王の近くに魔王の頬が切れてしまうのではないかというくらいに。だからまた魔王は息を吞んで身を震わせた。だが懇願するような瞳で勇者を見返し、声を絞り出す。

「ま、まあ落ち着け……こんな、剣が横にある状態では、わしも落ち着いて話せん……ひとまず剣をしまおうの？ の？」

勇者は魔王の言葉を聞いているのかいないのか、やはり少しも動かなかった。だが一瞬口の端を吊り上げると、地面から剣を抜き、鞘に戻した。

一瞬殺されるかと思った魔王は、ゆっくりと身を起こし、溜息を吐く。そして落としてしまった杖へと手を伸ばすも、勇者の方足が先に杖を蹴り上げた。魔王が慌てて宙へ手を伸ばすも、宙を舞った杖は勇者の片手に握られる。勇者は魔王を見下すように見下ろした。

「これがなければ、魔法を使えないのだろう？　いくら魔王とて……そうだろう？」

「ぬ、ぬう……？」

（……杖なくても、魔法使えるんじゃないが）

これももちろん、魔王は口に出さなかった。勇者がそう思ってい

るのなら、そう思わせておいた方がいい。

「ふっ……杖を奪われては仕方ないの。その杖、お気に入りだからの……」

魔王は諦めたような、しかしせせら笑いのような笑みを浮かべ長く息を吐いた。地面に座ると胡坐をかいて腕を組む。まるで自分が優位にいるような振る舞いで仁王立ちの勇者を見上げ、

「さて、何を話せばよいの……何を話せばよろしいのでしょうか勇者様」

しかしいまだに激昂している様子の勇者に、聖剣の切っ先を突きつけられ両手を挙げた。

「落ち着けと言っておるだろうが……」

「貴様は一体何の魔法を唱えたのだ？ 一体何をしたのだ？ 早く答えぬと首を刎ねるぞ」

勇者は魔王の言葉を聞かないでいる様子だ。朝だというのに、不穏な空気が流れる。

魔王は少し考えた。果たして勇者に通じる言葉なのだろうか。

「わしはただ、転送魔法を唱えただけじゃ」

「転送魔法……レポート、ワープか？ 嘘を言え、世界が一変しているではないか。一体何の魔法で世界を狂わせたのだ、早く答えろ」

ああ、と魔王は思う。

勇者はどうやら、自分が魔法で世界をめちゃくちやにしたと思っているらしい。そう思うのも仕方がないのかもしれない——ここは勇者の知る世界ではないはずだ。

「勇者よ……わしが唱えたのはただの転送魔法ではない。異空間転送魔法じゃ」

「イクウカンテンソウマホウ？」

聞きなれない言葉に、勇者が首を傾げる。魔王は黙ってうなずいた。

「そうじゃ。それは——別世界へと移動するための魔法じゃ」

「ベッセカイ？」

「うむ」

しかし勇者は理解していない様子でいる。そこで魔王は近くに転がっていた小さな木の枝を一本拾うと、地面に絵を描き始める。

「子供でも分かるように説明してやろう」

簡単な木の絵をいくつも描き、森を描く。そして木の絵の一つを枝で叩いた。

「いいか、ここに森がある。森には木が沢山生えている。この木一本一本を、一つの世界と考えるのじゃ」

「意味がわからない」

「……」

魔王は一瞬動きを止めるも、構わず説明を続ける。木の絵の一つ

に、芋虫を何匹か描き足す。

「我々は芋虫じゃ。芋虫は木から離れては生きていけぬ。またこの芋虫は別の木に移動することもできぬ。自分の住んでいる木から離れられないのじゃ」

「貴様は芋虫かもしれないが、私は芋虫ではないぞ。私は勇者だ」
「……」

魔王は黙って勇者を見上げる。勇者は平然とした表情を浮かべて地面の絵を見ている。

これが勇者なのか。これがこの男なのか。そう考えると、この勇者に敗北した自分が情けなくなってくる。しかし敗北は事実である。魔王は仕方なく、木の絵から芋虫を消し、棒人間二人を描き足した。

「いいか、これがわし、これがお前じゃ」

「貴様は棒人間かもしれないが、私は棒人間では——」

「うむ。お前の絵を描こうにもお前があまりに成人すぎて眩しく、また偉大すぎるお前を絵にするには恐れ多くて描けぬのじゃ。仕方ないからこれで我慢してほしいの」

「ならば、仕方がないな」

勇者は腕を組んだ。

なるほど、こう言えばいいのか。魔王は溜息を一つ吐くと、説明を続ける。

「我々は皆この木の外に出れぬ。いいか、勇者、これは勇者だからとてどうにかできることではない。この木は世界だ。我はこの木の中で生活している。そうだな——この木は我々の住む『ハートの国』」

じゃ」

木の幹に『ハートの国』と書く。勇者はうなずいた。

「これが『ハートの国』であるのなら、周りの木は『ハートの国』以外のものなのだな」

「そうじゃ。ほれ、この木たちは触れ合っておらんだろう？　だから我々はこの木から別の木へ移動できぬのじゃ。しかし我々は……異空間転送魔法を使ってしまった。その結果——」

棒人間二人から矢印を引つ張り、別の木へと伸ばす。そしてその先にまた棒人間二人を描き、『ハートの国』と描かれた木から棒人間二人を消し去る。

「わかったか、我々は別の木に、別の世界へ来てしまったのじゃ」

魔王はそこまで描くと、枝を草むらに投げ捨てた。勇者は黙って絵を見続けた。そして目を瞑って、長く息を吐いた。魔王が立ち上がると、勇者は目を開け魔王を見据えた。

「つまり……貴様の魔法で、我々はもといた場所とは全く違う場所に来た、ということか？」

「うむ。そういうことじゃ」

「だから魔物の魔法も、勇者も魔王もない、と？」

「ぬ、この世界はそういう世界なのか。そういえば随分静かな森よのお」

魔王はそれを聞いて森を見回し、深く息を吸い込む。そして満足そうにうなずいた。と、勇者が杖をこちらへと突き出してくる。

「ならばこれを返そうではないか。何が起きたのかはわかった。何でこんなにも訳の分からないことになっているのかも分かった」

勇者に差し出された杖を魔王は黙って受け取る。勇者は言葉を続ける。

「こんな訳の分からない世界はごめんだ……貴様の魔法でこの場所に来てしまったのだろうか？　ならばその異世界転送魔法を唱えて『ハートの国』に戻ることは、もちろんできるのだろっな」

「当たり前だとも！」

そう答えると、勇者は聖剣を抜き、魔王の首筋へとその刃を添えた。突然のことに、魔王はまたまた身を震わして目を見開く。

「な、なんじゃ……」

「やることは、わかっているのだろっ、魔王」

つまり、早くもこの世界へ戻せ、と。

「わ、わかつとるよ、勇者よ……」

魔王は苦笑いを浮かべて杖で聖剣を払おうとする。しかし勇者の力が強く、刃は一向に引かない。

——とつと元の世界に戻らなければ。こんなめんどくさい奴、一緒にいたくないぞ……

元の世界に戻ったら、すぐさまにこの勇者をどこか遠くに飛ばして、紅茶を飲んで寝よう。魔王はそう誓った。

05：魔王、ただの人になる

魔王は静かに溜息を吐くと、茨の大きな杖を両手で握り目を瞑った。全身の力を抜き、しかし魔力は全力で走らせる。だが、どうも魔力の流れが弱く、まとまらない。そこへ勇者が唐突に杖をがしりと掴んでこちらを睨みつけてくるものだから、更に魔力がまとまらない。まとまらないというよりも、漏れ出して低下していくように感じられる。

「……一体何じゃ、勇者。元の世界に戻せというのなら、わしの邪魔をしないでくれ」

勇者は杖を力強く掴んで放そうとしない。その顔を見ると何故か青ざめていて、だが表情自体は凜々しいままで、魔王は驚いてしまった。

「何じゃ、そんな顔をして」

勇者は何も答えなかった。だがしばらくして搾り出すように答える。

「貴様……本当に『ハートの国』に戻してくれるのだろうか」

「……」

「本当に戻してくれるのだろうか、私だけここに置き去りにするなんて真似をしたら、貴様ただじゃ済まないぞ」

なるほど。どうやら勇者は本気で戻りたくて仕方がないらしい。突然全く知らない世界に落とされたのだから、パニックやショックの一つがあって当たり前だ。しかし魔王は思わず笑ってしまった。

馬鹿にしている笑いではなく、嘲笑と苦笑いの混じった、妙な笑いが口元に浮かぶ。

——お前のせいで、こんな場所に出たのに。

だがもちろん、勇者を連れて帰る気はあった。正直なところ、置いていってしまったてもいいと一瞬考えたが、こんな妙な青年を見知らぬ世界に置いていくのは、その世界の人々に申し訳ない。

「うむ、もちろんお前も連れて帰るぞ」

魔王は奇妙な笑みを浮かべたまま答える。勇者はその顔をじっと見つめていた。

先程の勇者の險悪のため慌てて飛び立った鳥達が、徐々に森へ戻ってくる。森はまた鳥のさえずりに満ち穏やかな空気を作る。

「……ならばさっさと魔法を唱えろ」

勇者は苛立った様子で、魔王を突き飛ばすようにして杖から手を放した。腕を組んで溜息を吐く。どことなく弱気だった。

弱気な勇者を、魔王は初めて見た。

勇者のことは、いつも城から魔法で見ていた。この男は、どんなに危険な森や洞窟でも、あたかも怖いものなんて一つもない様子で入り進んでいた。自分の城——魔王の城すらも、たった一人で入ってきた。そんな勇者がいま、全く見知らぬ世界で弱気になっている。

「迷子の子供のようじゃ」

ぷつ、と噴出してしまった。

繰り出された右ストレートが魔王の顔面に炸裂した。

「むうつ！」

思わず杖を手放し、そのまま魔王は地面に転がった。痛む顔を抑えると、ペチャリと水の音がする。何か生温かいものが出ている。鼻血だ。

「お、おま……一体……」

鼻をつまみ、魔王は勇者を見上げる。そこにいるのは先程の勇者ではなかった。拳を硬く握り、見下すようにこちらを睨んでいる。

「魔王よ、笑っていないで早くもこの世界に戻るのだ」

「ぬ、う、鼻血が……」

「魔王よ」

「はい」

仕方なく魔王は鼻血を流したまま立ち上がり、杖を構える。早くしなければ殺されてしまう。

「しかし勇者よ、少し時間をくれぬか？ 魔力がなかなかうまくまとまらんのだ」

すると今度は勇者が笑った。失笑だった。

「魔物の王であるはずのお前が？」

魔王は何も言い返せなかった。事実魔力の調子がおかしいのだ。否、これはおかしいというよりも、魔力そのものがないような。

魔力そのものが、ない。

そういえば先程勇者が「魔法が使えなくなった」と言っていた気がする。

嫌な予感がした。周囲と自分自身に集中する。自分の中に、一切の魔力はなく、周囲の空気にも魔力はない。普段は満ちているはずなのに。

この世界は、魔力のない世界なのだろうか。この世界は、魔法や魔力という概念の存在しない世界なのだろうか。

鼻血が勢いを増して流れ出る。身体が震えてくる。

もしそうであるのなら――帰れない。

「どうした、魔王」

魔王の異変に気付いた勇者が眉をひそめる。

魔王はゆっくりと勇者に向き直り、鼻血を流し半べそかいた奇妙な表情で口を開く。

「わし、魔法、使えない……唯一のとりえなのに……」

勇者は一体何が起きているのか分からない様子で首を傾げる。だ

から魔王は殴られるのを覚悟で告げる。

「帰れません」

「もう一度言え」

勇者の腕が素早く魔王の胸倉を掴み、持ち上げる。

「もういちどいえ」

「かえれません」

その直後、森に魔王の悲鳴が響き渡った。驚いた鳥達が、慌てて再び飛び立った。

06：勇者、魔王と別れる

聖剣を抜くことなく素手で魔王を殴り倒した勇者は、ぼろぼろになつて倒れた魔王の背に腰を下ろす。

「一体どう責任を取ってくれるのだ、魔王よ」

魔王の杖を片手で弄び、その先で魔王の後頭部をつつく。

「……というか貴様、弱すぎではないか？ 貴様はそうにタレ目でも、一応魔王だろう？ ふん、こう見ると禍々しさも威厳もクソもないな！」

魔王の城で対峙し死闘をした、あの魔王とは思えない。あの時は確かに禍々しく威厳もあり、まさに『魔王』であつたのに。

うつ伏せになっていた魔王は、顔だけを上げて地面に頬杖をついた。そして深々と溜息を吐く。

「なんか……カルチャーショック？ 大きすぎての……ああー、魔法の使えぬ『魔王』なんて、ただの無能な王でしかないの……いやここは『ハートの国』ですらないんじゃないから、わしは魔王でも王でもない、いまはただの人じゃ……」

ぼやくようにそう言い、がくりと顔を下ろす。

そんなことを言えば、自分だつていまはただの人だと、勇者は思わず苦い顔をしてしまった。『勇者』は聖剣に選ばれし者で、魔王を倒すべく者。しかし魔法や魔力のないこの世界では、聖剣はその

力を失ってただの剣と成り果ててしまっている。聖剣がないということは『勇者』ではないということで、更に魔王もただの人と化してしまったのならば、それこそ聖剣なんてものは必要がなくなり『勇者』も必要がなくなる。

「ふっ……これも何もかも全て、貴様が妙な魔法を使った結果だ」

自分が『勇者』でないのなら何者なのか。考えれば考えるほど不安になってくる。その不安から逃げるようにして全てを魔王に押しつける。実際に魔王のせいであるのだから、仕方がない。

ところでよく考えると――魔王は馬鹿だ。

何故魔法が使えない世界に飛んだのか。

しかも勇者である自分をも巻き込んで。

そもそも何故『ハートの国』を出て別の世界に飛んだのか。

「魔王よ、貴様は馬鹿なのか？ 何故魔法の使えない世界に飛んだのだ？ 何故私をも巻き込んだのだ？ そもそも何故別の世界に行くこうと考えたのだ、そんなことを考えなければこんなことにならなかったのに」

勇者はすぐに口に出した。何もかもに苛立っていた。聞かずにはいられなかった。すると魔王はつと顔をあげ、勇者へと振り返った。その表情があまりにもやさぐれたもので、勇者は少しだけ驚いた。

「……お前、正気でそれを聞いているのか？」

魔王の目は据わっている。魔王はいまだに勇者の椅子にされているも、乱れた髪を手で戻しながら淡々と答える。

「勇者よ、その答えは全てお前じゃ。お前が全部悪いのじゃ。先から言ってるだろう、お前が全て悪いと」

意味が分からなかった。

勇者は思わず立ち上がり、魔王を見下して叫んだ。

「私の何が悪いのだ、魔王よ！ 貴様が妙な魔法を使ったからこの現状があるのではないか！」

だが魔王はゆっくりと立ち上がり、身体についた土を払って冷静に言葉を返した。

「勇者よ、その言葉、そのまま返そう。お前がいらぬ行動をしたからこの現状があるのではないか」

魔王の瞳の中には、怒りの色が静かに燃えていた。

「お前はわしを倒した。それはすなわち『魔王』という存在が『ハートの国』から必要なくなっただけのことじゃ。だからわしは怪我を癒すだとか何だと言つて『ハートの国』から出て、限りなく『ハートの国』に近い世界と世界の狭間から様子を見守り、また『魔王』が必要になったときに舞い戻ってくるつもりだったんじゃ」

「……どういうことだ？」

「……次元の違う話じゃ。お前達には関係のない、神学理論じゃ……忘れておくれ」

魔王が一体何を語ったのか、勇者には全く理解ができなかった。ただ魔王はしまった、というように表情を曇らせて自身の腰のあたりへと目を伏せた。だがすぐに顔を上げると怒鳴った。

「とにかく、だ！　とにかくわしが『ハートの国』を出ようとしたときにお前が邪魔してきたから我々はここににいるのじゃ！　お前、わしが魔法を唱えているときに、わしに襲いかかってきたじゃろ？」
「ん……ああ、のしかかったな」

あの時は魔王を逃がすまいと必死だった。あそこで魔王をしとめなければ、また数百年後に復活してしまうかもしれない、とっさに思った。

「そのの、何が悪いのだ？」

「……全部じゃよ、全部」

魔王はずい、と勇者に近づく。

「お前があんなことをしなければ、魔法はいつも通りに成功していたのじゃ。しかし……お前は魔法の詠唱中に乱入し魔法陣の中に入ってきた上に、わしにのしかかってきた！　そのせいで調整していたワープ座標がずれて結果この世界に来てしまったのじゃ！！　魔法の概念のない世界に、好きで来たと思うとったのか！？　しかも早くもこの世界に戻せ戻せと、どの口が言っておる。自分から飛び込み乱入してきたくせに」

そこまで言うと、魔王は深く溜息をついた。

勇者は何も反論できなかった。顔から血の気が冷めていくのを感じる。鞘に入った聖剣の柄をかたく握りしめる。

信じられなかった。こんなことになってしまったのが、自分のせいだなんて。

「……魔王よ、それは本当か」

「ああそうよ。本当だ。事実だ。現実だ。マジだ」

魔王は冷たく断言する。失われていた『魔王』としての威厳が、心なしか戻ってきたかのように勇者には見えた。

しかし——勇者は認めなかった。

「ふっ……わ、私は勇者だぞ？」

頭がフルスピードで回転する。

無理矢理でも反論しなければ。

「魔王よ……私は勇者だ、勇者は何でもお見通しなのだ。だから貴様の力も見抜いていた。だからあの時、私が乱入しても貴様はその転送魔法を成功させると読んでいたのだ……そして世界と世界の狭間で貴様との決着をつけようと思ったのに、貴様は何故かあの瞬間、魔法をミスしたのだ。貴様は想像以上の魔力を身につけていたのにな」

「……『想像以上の魔力』は誉め言葉として受け取っていいんじゃない？」

「誉めてない、誉めてない」

「……」

魔王がニタニタと笑顔を浮かべるが、勇者は全力で否定する。

「私は勇者だ。魔王を誉めるなんてことは、絶対にしない。魔王よ、私は貴様を貶しているのだ。『魔王』それなりの力があるにも拘わらず、その力を利用し切れていないことを貶しているのだ。ふん、こんなこともわからないなんて、貴様は低脳なのだな！」
「……」

それでも魔王はニタニタと笑っていた。鼻で笑うと、勇者に背を向ける。

「まあよい。何とでもほざくがよい。お前のせいでこの現状があるのは、事実なのだからな」

杖の先でこん、と地面を突く。そして魔王は森の中を歩き始めた。突然のことに、勇者は慌てて魔王に叫ぶ。

「おいどこへ行く気だ貴様！ まさか逃げる気ではないだろうな、この責任、きっちりしてもらおうぞ！！」

すると魔王はつと振り返る。

「一体何の責任じゃ、勇者よ。先から何度も言っておるだろう、これは全てお前のせいじゃと」

そして森の奥へと進んでいき、その姿が小さくなっていく。

「どの世界にも異世界の概念を理解し、また渡る力を持つ者が数人はいるものよ。わしや大賢者みたいのに。ひとまずこの世界の、そういう者を探し出さなければ帰れぬ……」

「なるほど、そいつを貴様が探し出してくれるのだな！」

「え、お前は探さないのか？」

「当たり前だ！ 貴様に全責任をとってもらうからな！！」

「まだそれを言うのか！」

森の奥で魔王が勇者へと向き直り、叫ぶ。

「だーかーらーお前のせいじゃ！ いい加減認めい！！」

「認めんわ！ そんな言いがかり！」

「お前が言いがかりじゃ！」

「私は勇者だ！ 言いがかりなどではない！！」

「ぬう、先から何なのじゃ、私は勇者だ勇者だドヤ顔で宣言しおつて！！」

「だから私は勇者だ！！」

「知つとるわ！！」

二人の怒鳴り合いが森に響く。その果てに、勇者はくるりと魔王に背を向けた。

「もういい！ 貴様みたいな者とはやっていけない。そもそも私は勇者だ、魔王と共に行動することも、魔王に責任をとらせることもすべきではない。責任をとってもらい、なんとかしてもらおうと考えた私が馬鹿だった……『勇者』はいつだって自力で問題を解決するものだ。貴様の言う異世界を知り渡る力を持つ者を探し出すなんて、私一人で十分なことだったわ！ さらばだ魔王、私は一足先に『ハートの国』へ帰らせてもらう！」

そうして勇者は、森の奥へと突き進んでいく。その背に魔王が叫んだ。

「ああ、ああ、わしだってお前みたいな面倒な者とは付き合いきれ

んよ！ もともと我々は『勇者』と『魔王』。なれ合うものではないんじゃないよ。さらばだ勇者、果たしてお前が『ハートの国』に戻るのか、楽しみにしておくぞー！！」

そして魔王も森の奥へと姿を消した。

07：勇者、ぼっちになる

魔王と別れた後、勇者は一人、ひたすらに森の中を進んだ。

そもそも魔王退治の旅をしているときは常に一人だった。こうして進むのも一人、魔物に襲われ戦うのも一人、死にかけのときも一人、夜野宿するときも一人。とにかく一人だった。魔王退治の命を受け、王都を出た数日は確かに寂しく不安だった。夜はいまにも魔物に襲われるのではないかと、眠れないときすらあった。しかしそれも一時のこと、魔王の城を目指すうち、一人旅にはもう十分慣れた。むしろそれが日常だと感じ、心地よいとも思えるようになってきた。

だから、たとえ別の世界での一人旅でも怖くない。

そう思っていた。

「おかしい……おかしいぞお……」

すでに高くに昇った日は、そろそろと降りてきている。

勇者はまだ、森の中をさまよっていた。

「くっ……一体なんだ……おかしい……私は一体……どうしたというのだ……」

焦燥した表情でばやし続け、ふらふらと森の中を進んでいく。

先程から目に映るのは、どれも同じような木々ばかり。相変わら

ず鳥の鳴き声や風の音が耳に入り、時折獣の鳴き声も聞こえる。しかしそれ以外に何の変化もない。

いくら進んでも同じ場所を歩いているような感覚。変わらない景色。

「くそ……」

おぼつかない足取りになりながらもすすみ続けた勇者だったが、ついにそこで歩みを止めてしまった。両膝、両手を地につき、うなだれる。

「一体何だ、この感覚は……」

焦りと不安。その二つが、先程から勇者を苛んでいた。

何故なのだろうか、と考えるもそれらしい理由が思い浮かばない。

そもそも自分は勇者であるのだから、焦りや不安なんてものを感じるべきではない。聖剣に選ばれ、人々の平和を得るために戦う。それが勇者だ。焦りや不安を感じて立ち止まるなんて、情けない。

「……ふっ、私は、勇者、なんだぞ」

そう自分に言い聞かせ、勇者はゆっくりと立ち上がる。そして周囲を見回すも、無限に広がっているかのような森しかない。

焦りと不安が増す。

——果たして自分は、無事に『ハートの国』に戻れるのだろうか。

そう考えると、ふと、後悔が生まれる。

——魔王と一緒にだった方がよかったかもしれない。

魔王は別の世界の存在を知っていたように、様々な概念を知っているらしかった。そもそも、魔法のないこの世界でも、元の世界に戻る方法はあると言ったのは魔王である。

別の世界についての概念を理解し、また渡る力を備えた存在を探せば帰れる。そう言っていた。

魔王はその他にも様々なことを知っているのかもしれない。

別の世界の概念を理解し、また渡る力を備えた存在を簡単に探す方法も、知っているのかもしれない。

何よりもここは別の世界。ひどく心細い。様々なことを知って、そんな魔王と行動した方がいいのかもしれない——

心細い？

——いや、私は勇者だぞ。たとえ孤独の中にあろうと、何だってやり遂げてきたではないか。

勇者はかぶりを激しく振った。

——魔王と共に行動だなんて、私は一体何を考えていたのだろう……馬鹿か、私は。私は勇者だぞ？

すぐ近くの木へ駆け寄ると、勇者は迷わずその木に自らの頭を激しく打ちつけた。

——私はどうかしているのだな。冷静になるのだ、私。心細い？魔王と行動？ 私は勇者だぞ、そんなことは考えない！！

更に激しく頭を打ちつける。額が擦り切れ避け、血が流れ出して、も勇者は気に留めなかった。

どんなに頭を打ちつけても、焦りや不安——心細さと魔王と共に行動したらよかったという後悔がとまらない。勇者としてあつてはならないその感情、考えは、とまるどころか更に増し、勇者を苛む。

——何故だ。

ついに勇者は木に頭を打ちつけるのをやめた。いくら打ち付けても焦りや不安は治まらない、それどころか増してくる。

目前を見れば、削れてへこんだ、血だらけの木の幹があつた。と、不意にその木の幹が歪む。木の幹だけではない、勇者のしている森全体がぐにやりと歪む。

「……？」

眩暈だろうか。どうやら頭を打ちつけすぎたらしい。

足が勝手に動き出す。ふらふらとよろめき倒れそうになり、慌ててバランスを保つ。しかしまた足は勝手に動き、勇者は千鳥足で森の中を進んでいく。眩暈はまだ続いている、意識は朦朧としている。

そのはてに、勇者は突如目の前に現れた深い川に落ちてしまった。

どぼん、と派手なようで間の抜けた音を立て、冷たい水の中へと落ちる。すると身体が一気に冷やされ、熱を持った頭も急激に冷やされる。その急激に冷えた頭で、意識が薄れていった勇者だったが、一つの答えを出した。

——そうか、私のこの焦りと不安、そして心細さと魔王への後悔……

頭が高速で回転する。

——これは、魔王を野放しにしている、というところからきていたのだな。

——危険な魔王をこのように野放しにしているはいけない。もしかすると、奴はこの世界をも魔物だらけにしてしまうかもしれない。

——そうだ、そうだ！ 奴を捕まえないければ！ この世界に残しては置けない、きつとこの世界を魔物だらけにしてしまう！ またそばで奴を監視していなければ、何をしでかすか分からない！

——この焦りと不安……私の勇者としての本能からきていたのだな……

そうして勇者は、冷たい水の中で答えを出し、意識を失った。

この勇者の行動を、魔王は木の影からこっそりと見つめていた。

なんだかんだ言って勇者と別れたものの、やはり勇者を様々な意味で放って置けなかった。

だが、突如木に頭を激しく打ちつけ、拳句の果てに深い川へとダイブした勇者を見て、魔王は首を横に振った。

——勇者よ、わしは城で、お前が自らの実力も知らずに強敵に立ち向かい、散々負ける様子を見てきたが……何故実力を上げようとせずただひたすらに敵に立ち向かおうとするのか、その理由がいまわかったぞ……

——勇者よ、わしはドン引きじゃ、お前はマゾヒストなのじゃな、痛いのが好きな人間なのじゃな……

「……この、変態勇者っ！！ ドマゾー！！」

魔王は現実から逃げるように、川に落ちた勇者に背を向け、森の中へと駆けて行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2952y/>

勇者と魔王のメタ発言

2011年12月25日14時48分発行